

C'n

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART

Topics

瀧口修造とマルセル・デュシャン

所蔵作品展 実験工房の作家たち

所蔵作品展 寄贈・寄託作品展



美術館に寄せられるご好意

新年明けましておめでとうございます。旧年は未曾有の災害に見舞われ、物理的にも、心理的にもひどく傷めつけられましたが、本年は一転して、平和で幸せな一年となりますよう、衷心より願っています。そしてまた、天がける龍のように、力強く飛躍したく、願ってまいります。

千葉県美術館は、開館以来17年目を迎えて、多くの皆様に親しまれるようになってきました。そのことは、展覧会の盛況や友の会会員の飛躍的な増加など数量的にも確認できるのですが、そのほかに、美術作品の寄贈、寄託が相継いで申し出られていることから、ひしひしと感じられています。

美術館への作品の寄贈とは、家に伝わったり個人で愛玩されてきた美術品を、一般の方にも見てもらいたく、活用してほしいと、無償で贈呈してくださることです。一方の寄託とは、所有権は譲らないまでも、個人の家に秘匿しておくことを望まず、多くの方楽しんでもらいたいと、公開展示用に作品を預けてくださることをいいます。もちろん、当館で展示可能な質や価値があるか否かを館内で慎重に検討した上で、さらに外部の専門家で構成される委員会にも審査していただく手続きを経るわけですが、近年は採択される作品の数が増し、展示内容の充実が大いに役立てられています。

最近のことですが、遠い富山県在住の個人の方がわざわざ当館を訪れてくださり、貴重な作品の寄託を申し出られたことに驚かされたこともありました。そのご婦人のいわく、「亡くなった主人がこうした大切な文化財は私的に秘蔵しておくべきでなく、公的な施設で多くの人に見ていただくべきだと言いましたので」とのこと、立派なご夫妻の志に感動させられました。そうした趣旨のお

申し出が、千葉市内、県内はもちろん、東京や近県の方々から、私ども館員が有り難さにめまいを感じさせられるほどに多数寄せられているのです。美術館の日常活動がようやく多くの方々に認知されたものと、嬉しく、感謝させられています。

昨年の暮れから引き続き、「瀧口修造とマルセル・デュシャン」展が、久々の現代美術の特別展ということで愛好家の好評を得ながら継続開催中ですが、続いて2月4日から26日までの短期間ではありますが、7階、8階の全会場を使って、「寄贈・寄託作品展」を披露する予定です。開館以来これまで千葉県美術館に寄せられてきたご好意がいかなるものであったか、多種多様な美術作品を通して具体的に実感できる機会となるはずです。どうかお見逃しのないようお願いいたします。

美術館を支えてくださる外部の方としてはまた、ボランティアの方々のご協力にも感謝に堪えないものがあります。社会的な活動からやや離れられた紳士や、ご家庭に余裕の出来た淑女の皆様が、社会への貢献のみを求めて活動してくださる姿に、日頃から心熱くさせられています。先頃の「酒井抱一と江戸琳派の全貌」展会場で見かけた小学生一行への鑑賞教育では、まるで孫に語りかけるように、それも美術への親しみを感じられるように分かりやすく、丁寧に話しかけている情景を間近にして、いつも以上に温かい気持ちとなり、感激させられたものでした。

観客の皆様はもとよりのこと、多くの方々からのご好意に励まされながら本年もまた、館員一同、楽しく、明るく、活動を続けて参ります。どうか相変わりがせず、ご愛顧、ご支援を賜りますよう、年頭に当たり改めまして、心よりお願い申し上げます。

[館長 小林 忠]



立原杏所《花木図》 江戸時代 嬉遊会コレクション



鑑賞教育の様子(瀧口修造とマルセル・デュシャン展にて)



瀧口修造撮影 カダケスのダリ邸 1958年
慶應義塾大学アート・センター蔵

瀧口修造とマルセル・デュシャン

Shuzo Takiguchi and Marcel Duchamp

瀧口修造は、1958年、ヴェネツィア・ビエンナーレ日本代表兼審査委員として渡欧し、ブルトン、タピエス、ミショーら多くの人物との会見を果たします。なかでもスペイン、カダケスのサルバドール・ダリ邸におけるダダの巨匠マルセル・デュシャンとの出会いは、その後の瀧口の活動に大きな影響を与えました。本論では、瀧口とデュシャンの出会いとその後の書簡による交流、そしてデュシャンの死後も続いた未亡人ティニー夫人との親交について簡単に紹介したいと思います。

前述したダリ邸での瀧口とデュシャンの出会いは、それが予期せぬ偶然の出来事であったゆえに、劇的なものとなりました。瀧口がカダケスを離れるとき、前日訪問したダリ邸の前をタクシーで通ると、ダリが手招きして中に入るように誘います。同行した美術評論家の東野芳明をタクシーに残したまま邸内に入ると、驚くべきことにデュシャンがいました。彼もバカンスを過ごすために、夫人とともにこの地を訪れていたのです。

『『あなたの芸術……』といいかけて慌てて、『ノン!』と打ち消したら、かれはにこにこしながら頷くので私たちの会話は笑いのまま終わってしまった』

と瀧口はのちにこのときの様子を回想しています。この短時間の会見の際ダリからデッサン、デュシャンからサインをもらいましたが、おそらくタクシーに置いてきてしまったのでしょうか、2台もカメラを持ち歩いていたにもかかわらず、写真を撮ることはできなかったようです。



瀧口修造 『マルセル・デュシャン語録』 1968年 富山県立近代美術館蔵

その後60年代に、デュシャンは日本に来ないかと誘われたこともあったようですが、結局一度も来日しませんでした。一方で瀧口は、『マルセル・デュシャン語録』の完成とともに渡米してデュシャンと再会する計画をあたため、1967年にはロックフェラー三世財団より3カ月間アメリカに滞在する費用の助成を受けています。ただ諸般の事情から「語録」の完成が遅れ、渡米計画が延期されているうちに、1968年10月2日、デュシャンが急死してしまいました。この数日後には「語録」が完成したので、もしデュシャンがあと半

年長く生きていたら、二人は再会を果たせたかもしれません。結局ダリ邸での出会いが、二人が直接対面した最初で最後の機会になってしまいました。

このように直接まみえたのは一度きりでしたが、1950年代末から60年代末にかけて、二人のあいだで多数の書簡が交わされました。デュシャンが瀧口に送った手紙は、全部で10通の存在が確認されています。ただそのうち1通は封筒しか残っておらず、本文は所在不明です。80年に及ぶ長い人生の割には、デュシャンが残した書簡は1500通あまりと少なく、瀧口に宛てられた10通という数は、10年に満たない期間に一人の人物に送られた手紙としては決して少ない数ではありません。デュシャンの手紙には、必要な情報を1、2行書いただけのそっけないものも珍しくありませんが、瀧口宛の手紙には、比較的長めで心のこもったものが多いように感じられます。

一方で瀧口がデュシャンに送った手紙は、デュシャンが書き込みを入れて送り返してきたものを除き、おそらく現存しないと思われる。デュシャンはもらった手紙に返事を書くとき、その手紙を捨てる習慣がありました。手元に手紙があるうちはまだ返事を出していないことになるため、ある意味合理的なやり方ではありますが、結果として貴重な資料の片割れが永遠に失われてしまいました。ただ幸いなことに、綾子夫人と関係者の尽力のおかげで、瀧口関連の資料は、手紙の下書き等も含めかなりの数が現存しています。特に瀧口にとってデュシャンが特別な存在だったこともあり、彼への手紙の下書きと、デュシャンが書き込みを入れて送り返してきた瀧口の手紙やその切れ端、電報の写しが、全部で13通残されています。



マルセル・デュシャン 瀧口修造旧蔵の《グリーン・ボックス》 1934年 個人蔵
©Succession Marcel Duchamp / ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2012

これらの手紙や下書きの文面には、瀧口の著作では語られたことのなかった新事実もいくつか見られます。《グリーン・ボックス》を入手した経緯、《トランクの中の箱》を購入したいとデュシャンに相談したけれども、結局東野芳明が先に買ってしまったことなど

after
MARCEL DUCHAMP
*
2012 日本語で「検眼図」
2012 日本語で「Oculist Witnesses」
2012 日本語で「1-1 (既述)」
2012 日本語で「Tableaux oculistes」



《遺作》の扉の前の瀧口修造とティニー・デュシャン 1973年
慶應義塾大学アート・センター蔵



瀧口修造、岡崎和郎《検眼圖》1977年
千葉市美術館蔵

が記されています。また荒川修作のニューヨークでの展覧会を見るようにデュシャンに薦めたり、南画廊でオブジェの展覧会を開く計画や、「語録」の非売エディション10部を誰に贈るかの相談なども興味深い記述です。雑誌等に書かれた文章に見られる控え目な語り口とは異なり、デュシャンへの手紙では、瀧口は意外なほど積極的に自らの要望を伝えています。これらの書簡と下書きは、「瀧口修造＝マルセル・デュシャン書簡資料集」として本展覧会の図録に収められています。関心をお持ちのかたはぜひご一読ください。

1968年にデュシャンが没した後も、瀧口は未亡人のティニー・デュシャンと死の直前まで文通を続けます。デュシャンはオリジナル作品《プロフィールの自画像》の提供や著作の翻訳許可など、「語録」への協力を無償で行うことで瀧口に対する友情を示しましたが、夫人も夫以上に瀧口に好意的でした。フィラデルフィア美術館とニューヨーク近代美術館が共催したデュシャン回顧展(1973)の図録に執筆を依頼されたり、《検眼圖》をポンピドゥー・センターのデュシャン展(1977)に展示できたのも、夫人の口添えがあったためと思われます。そのフィラデルフィアのデュシャン回顧展に赴いたときも、瀧口は夫人から歓迎を受け、二人の交流を記録した多数の写真がその様子を物語っています。1979年6月、その年の9月にギャラリーところで開かれるデュシャンの兄レイモン・デュシャン＝ヴィヨン展オープニングのために、ティニー夫人が来日することが決まりました。瀧口は早速、再会の喜びをしたためた手紙を夫人に送りますが、その9日後に緊急入院し、一週間後の7月2日には帰らぬ人となってしまいました。デュシャンの突然の死によって瀧口との再会があと少しのところでかなわなかったように、今度は瀧口の死によって、ティニー夫人との再会の機会が失われてしまいました。

本論で紹介したデュシャン夫妻との交流、そしてその結果生まれた『マルセル・デュシャン語録』や《検眼圖》などは、瀧口が美術批評の第一線から退いたあとの仕事であるため、どちらかというと個人的な動機から発したものと いえます。ただ二人が出会った1958年から瀧口が死去した1979年までの期間は、欧米や日本でデュシャン再評価が急激に進んだ時期とちょうど重なります。この間、デュシャンの著作集、研究書、全作品目録等の重要文献が立て続けに出版されるとともに、ネオ・ダダ、ポップ・アート、コンセプチュアル・アート、キネティック・アートなど60年代に起こっ

た新しい動向の先駆者としてデュシャンが注目され、1973年のアメリカでの回顧展と1977年のポンピドゥー・センターの開館記念展という2つの大デュシャン展によって、その名声は不動のものとなりました。瀧口はこれらの出来事にリアルタイムで密接に関わり、単なる紹介者としてだけでなく、関係者として直接関与していきます。このような事情から、二人の交流や瀧口によるデュシャン関連の試みも、プライベートな枠組みを超えて、大きな意味を持つことになりました。

[学芸員 水沼啓和]

[関連イベント]

[映画上映会]

「死なない子供、荒川修作」

1月15日(日) 14:00より(13:30開場) 11階講堂にて

「三鷹天命反転住宅」を中心に荒川修作の作品世界を紹介するドキュメンタリー映画。(2010年作品、80分)

監督：山岡信貴 ナレーション：浅野忠信

入場無料/先着150名

[市民美術講座]

「瀧口修造 2つの旅とデュシャン」

1月21日(土)14:00より/11階講堂にて/聴講無料/先着150名

【講師】水沼啓和(当館学芸員)

[ギャラリートーク]

担当学芸員による 1月9日(月)14:00より

ボランティアスタッフによる 会期中毎週水曜日 14:00より

*水曜日以外の平日の14:00にも開催することがあります。

瀧口修造とマルセル・デュシャン

2011年11月22日(火)▷2012年1月29日(日)

10:00—18:00(毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

【休館日】12月5日(月)、12月29日(木)~1月3日(火)

【観覧料】一般 800(640)円、大学生 560(450)円

*小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

*()内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの60歳以上の方の料金

*前売券はローソクチケット(Lコード:35146)、セブンイレブン(セブンコード:013-483)、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(1月29日までに販売)

左上：瀧口修造『検眼圖傍白(部分)』1977年 慶應義塾大学アート・センター蔵

所蔵作品展 実験工房の作家たち

Experimental Workshop : since 1951

今回、「瀧口修造とマルセル・デュシャン」展の開催にあわせ、当館が所蔵する現代美術作品のなかから、「実験工房」のメンバーたちによる作品を展示します。

実験工房のグループとしての活動は、1950年代に集中していますが、その後もメンバーたちは互いに協力しながら新たな実験を続けています。千葉市美術館ではこの造形部門に関わった美術家たちをわが国における戦後美術のパイオニアとして位置付け、折にふれて作品の収集を行っています。

1951年11月16日。

この日、東京や大阪などで開催されていたピカソ展の関連行事として「ピカソ祭」が日比谷公会堂で催され、この中で若い美術家や音楽家、そして技術者からなる集団・実験工房は創作パレエ「生きる喜び」を発表します。これが、グループとして最初の活動でした。「実験工房」という命名は、瀧口修造(1903-79)によるものです。

実験工房のメンバーは延べ14名。下記のように大きく造形部門と音楽部門に分けることができます(生年順)。

造形部門：駒井哲郎(版画 1920-76)、北代省三(絵画・立体造形・写真 1921-2001)、大辻清司(写真 1923-2001)、福島秀子(絵画 1927-97)、山口勝弘(絵画・立体造形 1928年生)

音楽部門：佐藤慶次郎(作曲 1927-2009)、園田高弘(ピアニスト 1928-2004)、秋山邦晴(詩・評論 1929-96)、湯浅譲二(作曲 1929年生)、武満 徹(作曲 1930-96)、鈴木博義(作曲 1930-2006)、福島和夫(作曲 1930年生)

そしてこの他に、今井直次(照明 1928年生)と山崎英夫(エンジニア 1920-79)がメンバーとして参加しています。

メンバーたちはコンサートや展覧会で協力し合い、あるいは外部からの依頼によって自分たちの技術や作品を提供しています。また、空間に対する関心や、新しい技術(テクノロジー)を自らの制作に取り入れようとする姿勢は、このグループが同時代の他の集団と一線を画する性格です。さらには、メンバーのほとんどが東京生まれの若者たちであることや、駒井や大辻の他には専門的な学校などで美術や音楽に関するアカデミックな、体系的な教育を受けた経験を持っていなかったことなども集団の特徴としてあげることができます。

彼らの活動は、共同制作という面ではセルゲイ・ディアギレフ(1872-1929)が率いたロシア・バレエ団(バレエ・リュス 1909-



実験工房のメンバー 1954年頃 撮影：大辻清司

29)やマーサ・グラハム(1894-1991)の活動を、社会におけるアーティストの位置付けを技術者と同様なものと考えていた点は、ロシア・アヴァンギャルドなどにその源流を求めることが出来ます。実験工房はこのような20世紀前半におけるヨーロッパやアメリカで見られたアーティストたちによる活動や姿勢を、第二次世界大戦後の日本で実践したグループでした(これは戦後彼らによって一挙に可能になったわけではなく、大正から昭和戦前期にかけて日本の美術や詩の分野における作り手たちが欧米の新しい動向を摂取・紹介していたことの積み重ねが前史として存在します)。

実験工房と同時期に関西で活躍していた集団に具体美術協会(1954-72)があります。この集団の個性が大阪の繁華街・道頓堀の猥雑なエネルギーと無縁ではなかったように、実験工房には東京という都市の性格が現れています(関西の集団で比較するのであれば、グタイよりもゲンビ—現代美術懇談会—の方が適っているでしょう)。

1950年代のアヴァンギャルドといえば、政治的な立場を標榜するアーティストが多かった時代です。政治の中心地である東京でグループ活動をする場合、特に四角張った議論がつきまどっていました。しかし、実験工房は「そんな時代」に東京を中心として活動をしていたにもかかわらず、ほとんど無色透明、政治のにおいがしません。代わりに見られるものは、進歩する科学技術に対する憧れと絶望であり、人間の存在に対する不安です。これらも作品の中で声高に語られているわけではなく、その多くは作り手のはにかみの向こうに見え隠れするばかりです。東京人の「はにかみ」とは、江戸の粋の名残かも知れませんが、実験工房とはメンバーたちがそんな感覚を共有している最初で最後のグループであるような気がします。

字数の関係で多くのことは申し上げられませんが、彼らが持っていたこの感覚というものは、最近お亡くなりになった北杜夫氏(1927-2011)の初期に書かれた小説やエッセイと似ています。ですから、今後実験工房について知りたいと思われる方は、氏の著作ないしは奥野健男氏(1926-97)の評論を併せて読むことをおすすめします。

[学芸係長 藁科英也]

所蔵作品展 実験工房の作家たち

2011年11月22日(火)▷2012年1月29日(日)

10:00-18:00(毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

【休館日】 12月5日(月)、12月29日(木)~1月3日(火)

【観覧料】 一般 200(160)円、大学生 150(120)円

※()内は団体30名様以上

※ 千葉市内在住60歳以上または千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※ 同時開催「瀧口修造とマルセル・デュシャン」入場者は無料



所蔵作品展 寄贈・寄託作品展

近年、展覧会の開催を機に、あるいは収集方針やそれにもとづく当館のこれまでの活動をご覧下さって、個人でご所蔵の作品の寄贈・寄託が増えてきました。当館での展示はもちろん、館外への貸出をはじめ内外での調査研究や情報交換なども増え、新しいコレクションは館の活動に活気と広がりをもたらしてくれます。

今回は、こうした近年のコレクションのなかから、特にまとまってご紹介したい三つの分野を特集として立てることとし、全館にわたって「寄贈・寄託作品展」を展開いたします。

特集の第一は、「嬉遊会コレクション～江戸絵画を中心に」です。「嬉遊会」とは、千葉県内にお住まいの美術愛好家たちの集まりで、実は当館の館長がその名付け親となりました。それぞれのご職業で活躍中の皆様が、共に絵画鑑賞に歩いたりコレクションの楽しみを共有されてきたのですが、仲間内だけでなく広く役立ててもらいたいと、江戸絵画を中心に作品を持ち寄り当館へご寄託いただいています。これまでも個別には企画展「浦上玉堂」や、所蔵作品展「江戸絵画のたのしみ」「若沖とその時代」「近代日本美術の百花」「岡本秋暉とその師友」など多くの展覧会で展示し、また館外からの貸し出し要請にもお応えしてご披露しており、知る人ぞ知る存在でした。今回がひとつのコレクションとしてまとめて全体をご紹介する初めての機会ですので、注目度もかなり高いと思われます。約50件のそれらの作品は、皆が関心を寄せ合いあれこれ語り合ってきた時間も加えて、身近なよろこびにあふれています。最近では愛好者の少ないことが残念だと、特に文人画を熱心にご覧であり、優品が集まっています。例えば渡辺華山(1793-1841)の名品の存在を核として、その師弟を追ってみたいというような、収集の一つの道筋も受け止めることができるでしょう。今も少しずつ発展中のこの嬉遊会コレクションの展示を通して、1点また1点と掌中に収めるように大切に鑑賞する楽しみを共有していただければと思います。

特集の第二として、版画家・小泉癸巳男(1893-1945)の代表作といえる《昭和大東京百図絵》の全100図揃をご寄託いただきましたので、初めて一堂に公開します。これは昭和5年に頒布会を開始し、昭和12年までに100図を完成させたものですが、100図すべてを支えた会員はわずかに4名だったといい、昭和15年に改めて揃えて目録等とともに木箱に収めて販売されたこのセットも、数点しか存在しないといわれる貴重なものです。「昭和の広重」を意識したと自ら述べるように、広重の「名所江戸百景」ならぬ「昭和大東京百図絵」で、時まさに関東大震災から復興した東京の姿が清新な感覚で版画に刻まれています。

特集の第三として、田中一村(1908-1977)の作品や関連資料約40件を紹介します。千葉ゆかりの日本画家で、奄美大島に渡って亜熱帯植物を題材とした独特の作品を残した田中一村については、昨年度、当館にて開催した企画展「田中一村 新たな全貌」の大

- 特集1 「嬉遊会コレクション～江戸絵画を中心に」
- 特集2 「小泉癸巳男《昭和大東京百図絵》 全点揃」
- 特集3 「田中一村」

きな反響がご記憶に新しいところでしょう。実は展覧会后、ご遺族のほか各方面より作品や資料の寄贈・寄託のお申し出をいただき、それらを総合しますと、一村の初期から晩年の代表作《アダンの海辺》(寄託品)まで、各期を見渡すことのできる一群となりました。当館への信頼とあつい期待が寄せられましたことを、ここに初めてご報告する次第です。今回は全体の概要をいち早くお披露目しようという展示になりますが、初公開の興味深い資料も含まれています。

そのほか、近年ご寄贈をいただいた楠原コレクションの絵画、千葉ゆかりの洋画家・石井光楓の水彩画の一部なども初紹介します。千葉市美術館のコレクションの最新情報をお届けする展覧会です。短い会期ではありますが、どうぞお見逃しなくお楽しみ下さい。

[学芸員 松尾知子]



渡辺華山(田園雑興詩画)より「第十二 冬日」 天保11年(1840) 嬉遊会コレクション

[関連イベント]

[市民美術講座]

「田中一村～寄贈・寄託作品展より」

[講師] 松尾知子(当館学芸員)

2月18日(土)14:00より/11階講堂にて/聴講無料/先着150名

[ギャラリートーク]

担当学芸員による 2月8日(水)14:00より

ボランティアスタッフによる 会期中毎週水曜日(2月8日を除く)

14:00より

*水曜日以外の平日の14:00にも開催することがあります。

所蔵作品展 寄贈・寄託作品展

2012年2月4日(土)▷2月26日(日)

10:00—18:00(毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 2月6日(月)

[観覧料] 一般 200(160)円、大学生 150(120)円

※()内は団体30名様以上

※千葉市内在住60歳以上または千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

◆ イベント報告 ◆ 高橋アキ・ピアノ・リサイタル ケージ・武満・実験工房／まなびフェスタ2011

去る12月6日、「瀧口修造とマルセル・デュシャン」展の関連イベントにて、現代音楽奏者として大変著名なピアニストの高橋アキさんをお迎えしました。

演奏して頂いた7曲の中でも特に興味深かったのは、ジョン・ケージ作曲の「ウォーター・ミュージック」。

写真にもある通り、ボウルに入った水、ラジオやトランプなど、ふだん楽器としてはあまり考えられないようなもので演奏されます。デュシャンがそれまでの美術の概念を覆してしまったように、ケージもそれまでの音楽の定義を変えた人物です。デュシャンとケージは直接親交があり、展覧会では2人がチェスをしている様子を収めた作品も出品しています。展示と密接に繋がった音楽を聴くことで、相互に理解を深められたのではないのでしょうか。

予定の演目が終了した後、満場のお客様からは熱い拍手が。アンコールとして、実験工房の作家たちに大きな影響を与えたオリヴィエ・メシアン作曲の前奏曲集から「鳩」を演奏して頂きました。

短い時間でしたが、さや堂ホールの荘厳な雰囲気とも相まって素晴らしいひとときとなりました。

[広報 磯野 愛]



プログラム

- 1 マルセル・デュシャンのための音楽 / ジョン・ケージ
- 2 ウォーター・ミュージック / ジョン・ケージ
- 3 遮られない休息 / 武満徹
- 4 二つのピアノ曲 / 鈴木博義
- 5 ピアノのための五つの短詩 / 佐藤慶次郎
- 6 内触覚的宇宙1 / 湯浅譲二
- 7 閉じた眼 —瀧口修造の追憶に— / 武満徹

「まなびフェスタ 2011」に参加しました。

「まなびフェスタ」は、千葉市生涯学習センターが開催するイベントで、様々な団体が日頃の活動をいかした体験講座などを行う、大人の文化祭のようなもの。美術館ボランティアの会は、今年も多色摺り木版画体験のワークショップを行いました。

当日はあいにくの空模様でしたが、午前午後あわせて4時間半あまりで、小さな子どもから大人までたくさんの参加者がありました。用意した図柄は、クリスマスカードと、来年の干支「龍」や椿の花など年賀状向けのデザインの5種類。なかには、毎年楽しみに参加してくれる方もあり、版づくりにも気合いが入ります。

今回の多色摺り木版画体験ワークショップは、千葉市の小・中・特別支援学校の子どもの作品展（総合展）の会期中の1月29日（日）に美術館での開催を予定しています。どうぞお楽しみに。

[学芸員 山根佳奈]



ボランティア日和 episode28

今年の4月からボランティア活動を始めようになって、早8か月。ボランティア経験もなく、子育て真っ最中の私ですが、千葉市美術館で小・中学生の子供たちを対象とした鑑賞リーダーの活動を主にしていきます。

日本画よりも西洋画に興味があった私が初めて千葉市美術館を訪れたのは、昨年開催された「伊藤若冲 - アナザーワールド」展でした。そこで伊藤若冲の《象と鯨図屏風》を目の前にして、時間を忘れるほど見入っていたのを思い出します。その時、持ち帰った美術館ニュースでボランティアが活動をしていることを知り、迷わず応募しました。（注：美術館ボランティアの募集は現在は行っていません）

鑑賞リーダーの活動では、子供たちと一緒に作品を観ていきますが、本当に反応が様々で、毎回新鮮な気持ちで取り組んでいます。グループ鑑賞の後の自由鑑賞の時間に、子供たちはお気に入りの作品を

見つけようと一人でじっくり、また数人で話しながら観て回ります。

「酒井抱一と江戸琳派の全貌」展でのことです。グループ鑑賞の時には恥ずかしいのか発言が少なかった子供たちも、最後に改めて聞いてみると「抱一の虎の絵がすごかった」「柿の絵が良かった」と嬉しそうに話してくれたのが、とても印象に残っています。

本物の作品に出会えるのは、とても貴重な機会です。作家が作品に込めた想い、例えば生涯をかけて追求したテーマや社会に向けたメッセージなどを感じ取り、それを実際に観ることでハッと気づくことがあります。

子供たちが新しい発見をしたり、お気に入りの一枚を見つけられるようサポートしていきたいと思っています。そして、美術館で絵を観る楽しさを見つけてくれたら嬉しいです。

[美術館ボランティア 今井寛子]

◎ 市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度下期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

○第8回 1月21日(土) 「瀧口修造 2つの旅とデュシャン」
[講師] 水沼啓和(当館学芸員)

○第9回 2月18日(土) 「田中一村～寄贈・寄託作品展より」
[講師] 松尾知子(当館学芸員)

[時間] 14:00より(開場は30分前) / [場所] 11階講堂 / [定員] 先着150名(入場無料)

◎ 2012年度 上半期 展覧会のお知らせ

蕭白ショック!! 曾我蕭白と京の画家たち 4月10日(火)～5月20日(日)

浮世絵師 溪斎英泉展 5月29日(火)～7月8日(日)

夏休み特別企画 美術の中の動物たち(仮) 7月14日(土)～9月2日(日)



曾我蕭白《竹林七賢図》(部分)
旧永島家模絵
三重県立美術館蔵 重要文化財

※都合により予告なく展覧会名、内容の一部が変更となる場合がありますのでご了承ください。

◎ 千葉市美術館「友の会」会員募集中

展覧会が何度でも観覧でき、展覧会図録も一割引で購入できる「友の会」入会が大変お得です。

[会員の特典]

- 会員は、企画展や所蔵作品展を年間、何回でも観覧できます。
- 会員の同伴者(3名様まで)は、団体料金で観覧できます。
- ミュージアムショップで、展覧会図録やグッズを10%引で購入できます。(一部除外あり)
- 展覧会や講演会等の美術館情報をお送りします。
- 会員対象の催しもあります。

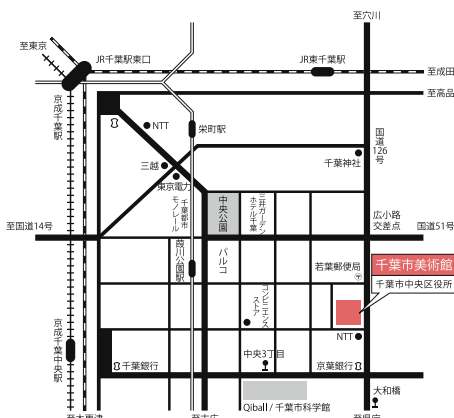
	一般会員	学生会員 (大学・専門)	ファミリー会員 (ご家族4名様まで)
入会金	1,000円	500円	2,000円
年会費	2,000円	1,000円	4,000円

入会のお申し込みは美術館受付にて。

◎ 編集後記

あけましておめでとうございます。美術館は12月29日から1月3日までお休みを頂きました。皆様はどのようなお正月を過ごされたでしょうか? 昨年から引き続き開催中の「瀧口修造とマルセル・デュシャン」展は一見難しそうな内容に思われますが、丁寧な解説がついていいますから現代美術入門編としても、またコアな現代美術ファンの方にも楽しんでいただける展示になっています。当館だけの開催ですので、お見逃しなく。

次号は、「蕭白ショック!!」展特集号として4月に発行する予定です。お楽しみに!



[交通案内]

- ◎ JR千葉駅東口より
- 徒歩約15分
- バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
- ◎ 千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- ◎ 京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- ◎ 東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- ◎ 地下に駐車場があります

[編集・発行]

千葉市美術館
〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chiba 260-8733, Japan
[発行日] 2012年1月5日
[印刷] 半七写真印刷工業株式会社

 千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

<http://www.ccma-net.jp>

